学術集会ご案内

第９回 日本生殖内分泌学会学術集会

会長
玉舎　輝彦
（岐阜大学医学部医学科臓器病態学講座女性生殖器学教授）

昨今は，ヒトゲノムの遺伝子配列を明らかにするという構造解析から遺伝子産物の機能解析に移りつつあり，この全遺伝子の機能解明は重要です．

１個の生物がもつすべての遺伝子のセットをゲノム，その生物や細胞が発現しているすべてのタンパク質の集合をプロテオーム，さらに，ゲノム解析をゲノミクス，プロテオーム解析をプロテオミクスと表現されています．21世紀には，プロテオミクスは生命科学のパラダイムとして発展しそうです．タンパク質の集合を系統的，網羅的に解析がなされます．

しかし，遺伝子の産物は同定されても，他の生体構成分子との相互作用を通してその機能を発揮することになります．さらに，遺伝子配列のもとに合成されたタンパク質がそのままの状態で機能を発揮することは稀で，様々な翻訳後に多彩な修飾を受けて，その機能が調節されます．

また，生物学的作用発現には鍵となる因子とその下流にある作用因子は複雑なネットワークを作っていて，将棋倒しのように，さらにカスケード（滝）状に情報が広がっていき，その情報も互いにクロストークして，なおさら複雑になっています．そのため，研究の焦点を１つの情報遺伝子や機能産物に絞ると人が象を表現するのに，象の一部を触って触る部分によっては象は異なって表現されることと同様に，全体として集合体として表現することが困難となりがちです．

一方，内分泌学では核レセプターと関係し，オーファンレセプターの発見により，これを用いて，これまで未知であったホルモンの探索が行われています．発見されたホルモンによる情報伝達路を通して生物学的現象の解明へオーファンレセプターは科学的道具として使われるようになってきています．これは従来の内分泌学的思考の流れと逆になっています．

また核レセプターのモジュレーターとして，例えばエストロゲンレセプターやプロゲステロンレセプターへの選択的に臨床上必要な作用を得るべく調節しえるモジュレーターの開発も進んでいます．

以上の研究の動向の背景の中に，何か臨床研究上，基礎研究上相互に，生殖内分泌発展のためのトランスレーショナルな内容を得るように，提出演題の中からシンポジウム形式などで行っていきたいと思っています．

日　　時：2004年11月27日（土）
場　　所：千里ライフサイエンスセンター
内　　容：招請講演，シンポジウム，ワークショップ，ランチョンセミナーを予定しています．

（招請講演）

１．神戸大学遺伝子実験センター教授　深見泰夫 先生
「プロテオミクス手法を用いた受精におけるシグナル伝達研究」

２．自然科学研究機構基礎生物学研究所性差生物学研究部門教授　諸橋憲一郎 先生
「性分化の分子メカニズム」

問合せ先：〒501-1194　岐阜市柳戸1-1　岐阜大学医学部女性生殖器学 内
第９回日本生殖内分泌学会事務局（担当：藤本次良）
TEL：058-230-6349　FAX：058-230-6348